

るものである。

ただ、そう考えたとき、ひとつ気になるのは、例の死神の位置、すなわち、頭と足元の関係である。「山形民話」は、何と、落語ではなく、グリムと同じ(頭の方にいたら助かり、尻の方に現れたら助からない)なのだ。これは、ちよつと、不思議である。グリムの翻案として作られた落語が「民話化」した際に、頭と足元(尻の方)とが再逆転したのだろうか?だとすれば、その理由は何か?

すでに述べたように、基本的には、この設定は、逆にしても、話の骨格は壊れず、物語の本質にかかわる問題ではなく、それゆえ、語り継ぎの段階で、理由なく逆転しても不思議ではない。ただ、グリムと落語の場合には、設定にそれなりの理由があるように思われる点もあるので、ここに記しておく。というのは、グリムの初版では、医者か、治るべき病人を「治療」する際、薬を病人の足元に塗ることになっているので、死神が足元にいると都合が悪いのだ(決定版では、薬草を飲ませるだけである)。一方、落語では、時に、助からないはずの病人の顔を死神がにらみつけるシーンをおくことがあり(例えば、前述の九九年の楽太郎の高座)、この場合は、死神が枕元にいないと都合が悪い。このような事情で、

意図的に設定が変えられることもあるだろうが、先の「山形民話」の場合には、深い意味はないだろう。

ところで、ここで、述べておかなければならないのは、実は、この死神の位置の設定は、グリム童話の中でも、初版から決定版にいたるまで、一定していないということである。いままで紹介してきたのは、もつとも定着している決定版の設定であり、実は、第二版(二八一九年版)では、これと逆、つまり、落語と同じなのである(小沢)が第二版の邦訳である)。もしかすると、落語「死神」の土台となったのは、決定版ではなく、第二版なのかも知れない。ちなみに、初版の設定は、決定版と同じなので、この設定は、改訂の過程で、二度も逆転したことになる(初版の邦訳は(吉原)〈註四〉)。ついでに言うておくと、初版では、ろうそくをつごうとする結末はなく、その前で終わっている。

さらに、もうひとつ、何と、落語「死神」についても、死神の位置の設定に関して、通常のものとは違う、逆転ヴァージョンが存在するのだ、(今輔)に収録されている「死神」のテキストを見ると、死神が病人の枕元に座っていれば病人は助かり、すその方へ座っていたら助からないという設定になっている。これは、通常の落語「死神」やグリム第二版と